

SAMPLE 試読用



先輩は

マジビッチ

あんぷらぐど
荒縄工房

SAMPLE 試読用

S M 小説

先輩は

マゾビッチ

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



SAMPLE 試読用

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

SM雑誌に「仲ゆうじ」名でSM小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的SM、一人称による告白形式の作品、伝奇SM小説などを発表し続けている。東京在住。

SAMPLE 試読用

目次

登場人物	7
いじめられるとキュンとなる	9
お仕置きで興奮しちゃう	27
場所とか選べるわけないでしょ	44
マゾを育成しよう	69
公開オナニーで狂う	87
アイドル奴隷	105
便器への改造	124
朝までアナル責め	140
輪姦からの落書き	158
ケツマンコのマゾ姉	176

SAMPLE 試読用

キュウリを手にして	194
アナルでイケるようになる	211
お姉様に処女を破ってほしいです	228
ご自由にお使いください	254
みなさまの一票をメス豚に	280
大盛況のレズ大会	297
姉いじめに覚醒して	313
予選会で恥ずかしい一発芸	328
ガバガバの穴	346
さようなら、ミスキャンパス	364
そして……	384
奥付	391

SAMPLE 試読用

SAMPLE 試読用

登場人物

ぼく 桑田 大学一年。

先輩 佐波幸菜^{ゆきな} 大学二年。浪人していたのでもうい

い歳だ。巨乳で、唇も色っぽい。

佐波菜々子^{ななこ} 女子校生。幸菜の妹。

映画サークルの主なメンバー

先輩女性陣

アンパン（安藤博子） ドS。サークルのボス。

ガッコ（梶川克子） ブス。

ダッキー（木多恒子） でかい。

SAMPLE 試読用

先輩男性陣

ミツイ（三井）

チツキ（内川）

コサツク（小堺）

ぼくと同期の男たち

フジモン（藤倉）

マーシ（益子）

SAMPLE 試読用

いじめられるとキョンとなる

「桑田くん、私もう死ぬ」

佐波幸菜^{ゆきな}はいつも大げさに言う。

「死ぬのを少しだけ待って、とりあえず一日ぼくにください。先輩のこれまで経験していないことをすべて経験させてあげます。それから死んでも遅くない」

「めんどろなことは嫌よ」

突然、損得を計算しはじめるのだが、そもそも計算が上手ではない。

「簡単なことですよ。先輩には、マゾビッチになっていただきます」

SAMPLE 試読用

「ちよつと考えさせて」

突然、考えはじめるのだが、そもそも考えるのが上手ではない。

「だめですよ。先輩はバカなんだから、考えたつていい結論は出ません。どうして先輩のようなバカがこの大学に入れたのか、ホント奇跡ですよ。落第しても当然で、それを救つてあげたのは誰です？」

「桑田くん」

あきらめるのも早い。

「わかつてるじゃないですか。ぼくという後輩に出会ったのも奇跡ですよ。昔の映画でいえば、先輩はただの猿だったのですが、ぼくというモノリスがあらわれ

SAMPLE 試読用

て道具を使うことを覚えるわけですよ」

「頼むから、わかるように言つて」

たいがいのが、幸菜にはちゃんと伝わらない。

試験勉強を教えてきたハードな三日間、彼女から何度、その言葉を聞いたことか。

教えて、わかるように言つて……。

我ながら、今日という最終目的がなければ、やり遂げられなかったと思う。高校の物理に戻って教えるなんて、ぼくにとつてはムダでしかない時間。

だけど、アイドル顔をして、みごとな乳房を盛り上げてている先輩、幸菜。セクシーだし、パツと見は清楚なお嬢さん風だ。先輩がバカなりにマジメに生きてき

SAMPLE 試読用

たのは正解で、もし不まじめな世界に入り込んだら生きて出られなかった。それほど生存能力の低い生物だ
と思う。

「だったら、ぼくの言うことをきいていればいいんです。あなたはバカな先輩で、マゾビッチなんだから」
「だから、なによ、そのマゾビッチって」

バカは必ずすぐに打ち返してくる。人に聞けばいい
という安易な態度から抜け出せない。それでいて説明
すれば「わからない」だし、わかったとしても覚えて
いない。

「いじめられるとキュンとなる壊れた女子のことです
よ」

SAMPLE 試読用

「はあ？」

おもしろいことをこちらが言っても、字句にとらわれて、まともに理解できないことが多く、その逆でまじめなことを言うと笑い出すことが多い。「ホイヘンスの原理？　ホイヘンスって、ウケるう」とか。

「考えるな、感じる、です」

「はああ？」

語気を荒らげたとしても、怒っているわけではない。先輩はすぐに混乱し、混乱すると彼女の脳は怒りモードにシフトアップするようになってきている。これまで彼女はそれでたいがいの事態を乗り切ってきたので、あとはアクセルを踏んで怒りまくればいと学習してし

SAMPLE 試読用

まったのだ。いわゆるオペラント条件付けである。犬の躑しつけと同じだ。周囲の大人たちは彼女の怒りモードに慌てて、なんとかしてあげてしまおう。身についてしまった幼児性だけれど、そこが幸菜をかわいく見せている。

「たとえば、ぼくの命令に逆らわないこと。できますか？」

「できるわよ。それぐらい」

そこは強気になるところじゃないと思うのだが……。そういう場合、すぐに打ち返そうとするバカ的な行為は、自滅的決断をやすやすと受け入れる。

「今日はスカートですね。腿が全部、出るまで引っ張

SAMPLE 試読用

りあげてみてください」

「えー、桑田くん、それは」

バカ先輩の幸菜。周りを見回す。ファミレスの奥の席。

「三秒以内にやらないと罰を与えます」

「できないわ」

手が震えている。途中まではやろうとした。スカートに手をかけた。そこで止まったのだ。

彼女自身にそう思い込んでもらいたいから、バカだバカだと連発してきたが、もちろんこの学校に入ったぐらいだから、そんなにバカではない。恥じらいはあるし、いいことといけないことの区別はつく。

SAMPLE 試読用

「ここじゃないところで、ね。お願い」

鼻のあたりが少し光る。じんわり汗をかいている。

興奮というよりも、自分がいまとんでもない罨にかかったのではないかと気づいている。「桑田くん」と甘えた声を出せば、後輩であるぼくが、なんでもしてくれると思った。その結果、無事に試験を終えることができた。そこそこの点が取れているはずだ。しかしおまえはマゾビッチになるのだ、ドーン！

「三秒は過ぎましたよ。やらなかったので罰を与えません。いますぐスカートを腰までめくりあげて、パンティを膝までおろすのです」

「えっ」

SAMPLE 試読用

言葉だけのやりとり。実行する必要はない。さつきまでのバカキヤラを通せばいい。

「いやだー、桑田くんたら。ゴメン、今度ちゃんとやるから。今日は友だちと約束があるの。遅くなっちゃったからもう行くわ。じゃあね」

とか言つて席を立てばいいのだ。

ファミレスの席はすぐに立てる。ぼくから素早く逃れることができる。ステイブン・セガールみたいにテーブルをぼくに押しつけて、立ち上がれないようにしてもいい。

「見られちゃうかもしれないわ」

顎を突き出し、小声で言う。

SAMPLE 試読用

そのしぐさの可憐なこと。スマホのCMに出しても
恥ずかしくはない。恋人として連れ歩きたいと思っ
ている男は多い。しかし半日付き合えば彼女と長くい
ることは地獄のように思えるだろう。わがままで、きま
ぐれで、物を知らず、怒り出す。

実にキュートな生き物だ。ペットとして飼育するの
に適している。

できれば先輩から、ぼくに飼ってくれと懇願してほ
しい。

「ふうふうふう」

奇妙に震える呼吸。彼女の指がスカートの裾にかか
って震えていて、それが徐々に持ち上がっている。

SAMPLE 試読用

ぼくはコーヒーを飲みながら、先輩のしぐさをチラチラ眺める。周囲の人が気づいても気づかなくても、ぼくはどつちでもいい。

だが、先輩にとつてはそうではないだろう。

どれぐらい時間がたっただろう。やろうとしたことだけは認めて、別の罰を与えようかと思つたとき、「くうう」と言いながら、とうとうスカートを腰まで引き上げた。

黒いニーハイ。そこからスカートまでは生足。黒いパンティが見えていた。

「黒か」と思わずつぶやいてしまった。

ふと先輩の顔を見ると、彼女もこつちを見つめてい

SAMPLE 試読用

た。その真剣な眼差し。一文字に口を結び、小鼻をふくらませている。

幸菜も周囲を気にすることをやめたのだ。ただぼくだけを見ている。正解だと思う。それでいいのだ。

黙っている。許しは与えない。

それを確認したからか、「はー」とため息をついて、指をパンティにかけた。そしていつきに膝までおろすと、スカートが元に戻った。

失敗続きの手品に成功したような表情。誰だってやろうと思えばできることなのに。

黒い下着だったのは残念だった。ニーハイの上に飾りのようにパンティが引っかかっている。

SAMPLE 試読用

「やればできるじゃないですか」

「桑田くん」

甘えた声。泣き出すのかと思ったがそうではなかった。こちらにズレてくると、体を斜めにしてぼくに抱きついたので。

「ごめんなさい。バカな先輩で……」

返事のしようがない。微かにオツパイを当ててくる。「ねえ、それにしてくれない？」

「それ？」

「ビツチなんとか……」

「マゾビツチ」

「マゾビツチにしてくれない？」

桑田くんのマゾビツ

SAMPLE 試読用

チにしてほしいの」

覚えたての単語を妙にハッキリ発音されると、こつちが恥ずかしい。

「はいはい」

ぼくは酔った女を介抱するように、彼女を元に戻した。

さすがにこのしぐさは、多くの人たちに見られたようだ。しょうがない。だが多くの男たちは彼女と恋人同士のように見られたとしても、嫌ではないはずだ。

「今日、一日、ぼくの命令に従う？」

「はい」

「そのままパンティを脱いでくれませんか？」

SAMPLE 試読用

ハツとするその瞳。唇に力が入る。なにか言いたくなつたのかもしれないが、飲み込んだ。えらいぞ、先輩。

落とし物でも拾うようにして、優雅に幸菜は膝でとまっていた下着を足から引き抜いた。頭脳は大学レベルとしては少し物足りないが、こうしたしぐさや視線のレベルはとてつもなく高い。

同じサークルの一年の男たちは、最初から先輩を目当てにしていた。勧誘のときに口説かれ、彼女になつたかのような錯覚に陥り、入会してしまっていたのだ。よくある危ない勧誘と同じ方法である。

サークルは非公認のものだった。同じようなことを

SAMPLE 試読用

やっている大学公認のグループはとて有名で大量に人を集めている。

一方、こっちは同じ映画サークルでも、極めて地味。先輩も揃っておらず（いない年度がある！）、みんな騙されたような気分になっていた。

映画を撮るのかと思ったら（幸菜は「私を女優にして」とか言っていたので）、そんな予算も機材もない。そのため、ぼくと一緒に騙されたやつのはずが辞めたし、残っているやつも名前だけで参加はしていない。

幸菜と同期の三人の先輩たちも、ほとんど来ない。新人歓迎会でやっと八人。その後の活動で四人か、最

SAMPLE 試読用

悪、ぼくと幸菜だけ。

その理由は幸菜にある。彼女は同期や彼女の先輩たちに可愛がられていたのと思ったのに、そうではなかった。嫌われているのである。バカだから、というだけではない。困ったやつだからだ。危なくて付き合えないのである。この大学はそこそこ優秀なので、今後の進路もかなり高い目標を持っている人たちが多く、幸菜に関わればそうした人生そのものが破壊されてしまいうさだからだ。

だけど、ぼくにはわかる。幸菜をちゃんと調教してやれば、なんとかなるかもしれないじゃないか、と。いじめ抜いてやれば、マゾビッチぐらいにはなれるの

SAMPLE 試読用

ではないか。

だから会合には毎回出て、なんの進展もない映画制作のプロジェクトに関わり、シナリオ作りに参加してきたのだ。この不毛な活動は学業にマイナスなだけではなく、人間性にとってもマイナスに作用しそうだったが、ぼくは耐えた。

そしてついに、いま、幸菜はぼくの前でパンティを脱ぎ捨てたのだ。

「脱いだものをテーブルに広げてごらん」

「えっ、ここで？」

SAMPLE 試読用

お仕置きで興奮しちゃう

幸菜はくしやつとした黒いパンティをテーブルに置いた。そして手で広げていった。

「チエツクしてあげましょう」

ぼくはクロツチ部分に指先をあてた。

「どうしちゃったんですか、先輩。すごく湿っていますけど」

「ああ、それは、ほら、汗とか」

「先輩って、まんこで汗をかくんですか？」

真っ赤になっている。自分の下着を明るいファミレスのテーブルで広げさせられている。彼女の指先は震

SAMPLE 試読用

えている。

「正直に言ってください。なんで湿ってるんです？」

「だって、すごくエッチな気分になつて……」

「もう始まっているんですよ。ぼくの命令に従う一日が。正確に言葉を使ってください。ごまかしはなしです。はっきり言ってください」

「あそこから、おつゆが出てしまいました」

「あそこ？ どこです？」

「正確に言えば、性器からバルトリン腺液と膺分泌液が流れ出したの」

「これからは、先輩に関していえば、それはスケベ汁と云うことにしませんか？」

SAMPLE 試読用

「スケベって……」

「言つてください」

「幸菜のスケベ汁が性器から……」

「マゾビッチの性器ですからね。マンコでいいですよ」

「幸菜のマンコからスケベ汁がいっぱい出てしまいました」

先輩は目を自分の下着に向けて、ふっくらとした唇を振るわせながら、呪文のようにそう口走っている。

ぼくはいまだと感じた。彼女の横にぴったりと体を寄せ、ポニーテールの髪をつかみ、引っ張った。

「うっ」

SAMPLE 試読用

白い喉が露わになる。顔を上に向け、目をぼくに向けている。

「これからは、ちゃんと正確に言うんですよ。先輩らしい言葉づかいでね」

「わ、わかったわ」

ちよつとした暴力。それだけでもショックだっただろう。

「パニツシユメントって言葉、ご存知ですか？」

「それぐらい知ってるわ。罰とか……」

「お仕置きですね。どんなお仕置きが好きですか？」

「好きなものなんてない……」

再び髪をぐいっと引く。

SAMPLE 試読用

パンティを押さえていた手が離れそうになつたので、ぼくは右手で掴んだ。

「命じたことに逆らつてはいけないんです。パンティを広げろといったんです。それは解除していません」

「わかりました。だけど、手が痛い……」

男に掴まれ、テーブルに押しつけられている。

「まだ返事を聞いていません。好きなお仕置きはなんですか？」

「えーと」

考えるふりをしている。思い浮かばないだろう。

「じゃあ、提案しましょう。ぼくがいまからノートに三つ、お仕置きを書きます。先輩がそこから選んでく

SAMPLE 試読用

ださい」

「わかったわ」

やつとぼくが髪からも手からも離れたので、幸菜はホツとしたようだ。

彼女に見えないように、ノートに「一、お尻叩き
二、マンコ晒し 三、公開オナニー」と書いた。

「どれがいいですか？」

「どれって、見せてくれないの？」

「番号を言ってください。好きな番号を」

少し迷っていたが、「二番？」とさぐるようにぼくを見る。

「いいんですね、一番で」

SAMPLE 試読用

「やっぱり三番」

「ふーん、三番のお仕置きが好きなんですか。先輩つてやっぱりスケベだなあ」

ノートを彼女に見せた。

「えっ、なにこれ。こんなのズルい」

「だって、先輩が好きなお仕置きを言わないからいけないんですよ。さっそくやってもらいましょう。公開オナニーですからね。ここだとお店に迷惑がかかるから、外へ出ましょう」

ブツブツとなにか文句を言っている幸菜。もちろん彼女に支払ってもらおう。

そして外に出る。

SAMPLE 試読用

まともな女なら、ここで逃げるだろう。ほら、駆け出せよ。そして十分に離れてから「桑田くんのバーカ、変態、死ね！」と叫んでアツカンベーでもすればいい。しかし、幸菜は違っていた。

「恥ずかしいから、桑田くんだけならいいけど」

「いえ。むしろぼくはいません。先輩、一人でやるんです。オナニーってそういうものでしょう？」

「ムリよ」

「やりもしないで」

「だって」

幸菜の手首をつかんで、電車に乗ると、彼女は怯えている。電車の中でやらされるのかと思っっているよう

SAMPLE 試読用

だが、まだそれは早い。ここでいきなり壊してもつまらない。じんわり楽しませてもらいたいのだ。

繁華街の広がる駅で人混みに流されるように改札を出る。幸菜はパンツをはいていない。ちよつとでも人のバッグがお尻に当たっただけで、過剰に反応している。

「見てごらん」

駅前にあるガラス張りのビル。その二階にカフェがあり、窓側に面してカウンターがある。足元はスモークになっているが、顔ははっきりわかる。

「あそこでやるんだよ」

「え！」

SAMPLE 試読用

「しかも一人でね」

「桑田くーん」

「さっさとしろ。ここから見てるからね。電話をしな
がらやるんだよ」

混雑した店に入り、彼女がカウンターの端に席を見
つけるまで十分ほどもかかった。

左側は若い女の三人組。右側は柱。うまいところを
見つけたものだと関心する。

「見えてる？」

電話がかかってきて、彼女の熱い言葉が流れた。

「はやくしろ」

手を股間にあてている。

SAMPLE 試読用

「スカートをまくりあげろ。前だけ」

「ふううん」

気づかれないように声を殺しながら、幸菜はスカートの前を裏返す。奥までは見えないが太ももが白く光る。

そこに指が入っていく。

「ふうーん」

切なそうに、なにかを訴えるように、彼女の鼻息と甘いうめきが流れている。隣の女が気づき、露骨に嫌な顔をする。友だちと顔を寄せてなにかを話している。電話しながら股間を搔きむしる女。変態、ということだ。

SAMPLE 試読用

しばらくそうしていると、隣の三人が立ち上がり、軽蔑と冷笑で幸菜を見下して去っていった。かわりに若い男の二人組が座った。一つ席をあけている。

ぼくは「まだやってるよ」と命じて、カフェに向かった。

中は混雑し、暑かった。ダウンを脱いで、カフェラテを買って、彼女の横に座った。

「もういいよ」

びつくりした顔。だが、目はとろんとしている。

電話をしまう。

「両手でやってごらん」

耳たぶに唇をつけて囁く。

SAMPLE 試読用

「ふううん」

抗議のため息。両手を股間に入れた。

「右手を出してごらん」

細い指、ピンクのマニキュア。指先がべとべとになっている。

「気持ちいいだろう」

うなずく。

コーヒーを飲み終えるまでやらせておいた。くねくねとぼくと柱にはさまれて体を動かしながら、手を止めない。

「幸菜は淫乱だね」

わざと名前を出し、大きな声で言う。ガラスに反射

SAMPLE 試読用

して左側の男たち、その先の客にまで聞こえたのではないか。

一斉にこつちを見たような気がした。

窓にうつすら、陶醉している彼女の姿が映り込んでいる。きつと隣の連中もそれが見えたのではないか。

「行くよ」

「あつ」

カワイイ声を出し、慌てて立ち上がる幸菜のスカートはめくれたまま、腿が濡れて光っていた。

「座席を汚すなよ」

「ごめんなさい」

紙で慌てて拭く。

SAMPLE 試読用

みつともないメスブタ。隣にいる男たちが思わず先輩をまじまじと見ていた。ぼくと目が合うと少し焦っているようだったが、安心させるためにニヤリと笑って返してあげた。

彼女の腕をつかむようにして店を出た。

雑踏の中に飛び込む。

「ふー、すごかったあ」

「なにが？」

「わけがわからなかったあ」

少し離れたところにある個室鑑賞の店に連れ込む。

雑踏から逃れて、幸菜はホッとしているようだが、ここがどういう場所かよく知らないのだ。

SAMPLE 試読用

甘ったるい消臭剤のニオイ。

「なにをするの？」

「勉強してもらおうと思ったんですよ」

「難しいのはムリよ」

「わかってますって。黙って」

カゴを持って黙々と棚の中を歩く男性たちの姿に、幸菜も声が出なくなった。DVDやブルーレイのパッケージを見て、目を丸くしている。

彼女にカゴを持たせる。ぼくのと二つ。その腕をがっちりと抱えてマニアックな棚へ。いくつかパッケ―ジを抜き出してカゴに入れていく。

店員は隣同士の部屋を用意してくれたので、同じ階

SAMPLE 試読用

へエレベーターで行き、狭い部屋に入る。一つはソファタイプ。一つはイスタイプ。イスタイプに荷物を置き、ソファタイプに二人で入る。

「しゃべるなよ。黙って見るんだ」

ヘッドホンを彼女につけさせて、一本目の作品を再生する。

AVを見たことがない、ということはないと思う。女子だってどこかで少しぐらいは見ているはずだ。凌辱もの、SMもの、野外調教ものを飛ばしながら再生していくうちに、幸菜に変化が現れた。唇をかみしめながら、体を熱くし、股間に手を伸ばしていた。

「先輩、脱いじゃえば？」

SAMPLE 試読用

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一七年四月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 SM研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。「意見、感想、提案など随時、ブログで受付中。」

SAMPLE 試読用